大学入試に関する高校教員と大学教員の意識の構造

——ＡＯ入試を中心として——

大膳　司，長澤　武，岩田 光晴（広島大学）

高校教育の多様化，18 才人口の減少，生きる力を形成する教育など，大学を取り巻く状況の変化に伴って，大学・学部の求める学生像を明らかにし学生を募集・選抜するＡＯ入試に対して強い期待が向けられている。しかし，高校教員や大学教員に対してアンケート調査を実施した結果，賛否両論様々な意見が確認された。直接的には，高校教員の①進路指導の在り方やスタンス，②入学者選抜の「評価」に対する視点，③高大接続に対する考え方，の相違や，大学教員が志願者の学力面以外の個性を評価することに慣れていないことなどが指摘されるが，高大連携の制度的整備の状況にも原因があるのではないかと思われる。

高校教育の多様化や 18 才人口の減少という大学を取り巻く状況の変化に伴って，各大学が求める学生を受け入れるための入学者選抜方法に関する議論が盛んとなっている。とりわけ，入試を専門的に管理・運営する為の部署（アドミッションセンター等）が中心となって実施するＡＯ入試に対して関心や期待が高まっている（中央教育審議会 1996, 1999)。

その半面，多くの高校や大学から，ＡＯ入試に対して，青田買いではないか，推薦入試とどこが違うのか，興味関心だけで選抜して学力不足な学生が入学してこないのか，などの意見や疑問が投げかけられているのも事実である（河合塾のホームページ参照)。

そこで，本研究では，全国調査データに基づいて，ＡＯ入試に対する高校教員と大学教員の意識構造や実施状況について実態を明らかにし，ＡＯ入試の現在の問題点を明らかにするとともに，今後発展していくための課題を探っていくこととした。

なお，分析で使用するデータは，科学研究費補助金（萌芽研究）の支援を受けて実施している「大学全入時代における入学者選抜方法に関する研究」(代表者　前川 功一　広島大学前副学長・アドミッションセンター長）の一環として高校進路指導担当教員（以下，高校教員と略）と大学全学・学部入試委員長（以下，大学教員と略）に対して実施したアンケート調査によって収集したものである。

平成 14 年 9 月にアンケート調査票を配布し，12 月末までに回収を終えた。

配布数と回答状況は表 1 の通りである。

表 1 アンケート調査票配布数と回収率

	配布数	回収数	回収率
高校進路指導担当教員	1000	276	27.6%
大学全学・各学部入試委員長	951	406	42.7%

注)・高校は、高等専門学校や養護学校等の障害児対象高校を除いて、広島県の高校は全数(139校)、残りの861校は北海道から沖縄県までの高校から無作為抽出。
・大学は、国公私立大学の内、5学部以上をもつ大学(103校)の全学入試委員長と各学部入試委員長に調査票を送付。

回答は全国の大学，高校から集まっており，大学においては，回収率も 42.7%と高く，本データは大学の代表的な意見を示していると考えられるが，高校の方は，回収率も 27.6%と低いと同時に，表 1 の注でも指摘した通り，広島県の高校を全校対象としたため，少し広島県の高校の意見に回答全体が引きずられていることも考えられる。

1. 高校教員の入試に対する意識構造

1.1「AO入試」の制度としての適切さの意識

「ＡＯ入試」の制度としての適切さの意識を質問したところ，有効回答者のうち，「とても適切である」は 3.6%，「ある程度適切である」は 28.1%，「どちらともいえない」は 30.3%，「少し改善した方がよい」は 21.5%，「全面的に改善した方がよい」は 16.4%であった。(表２)。

表２AO入試の制度としての適切さの意識

	回答者数(%)
とても適切である	10 (3.6%)
ある程度適切である	77 (28.1%)
どちらともいえない	83 (30.3%)
少し改善した方がよい	59 (21.5%)
全面的に改善した方がよい	45 (16.4%)
合計	274 (100.0%)

以下の分析では，「とても適切である」の回答者数が 10 人と少ないので，「とても適切である」と「ある程度適切である」を合わせて「適切である」(回答数 87(31.8%))に再カテゴリー化したものを利用した。

1.1.1 「適切である」と判断した理由

なぜＡＯ入試が適切であると思うのかその理由を質問してみたところ，以下のような理由が示されていた。

【意欲，活動実績など，個人のアピールが可能】
- 学びたいという意欲を汲む
- 高校時代の活動がアピールできる
- 資格等を生かせる
- 特定の分野に強い関心と意欲を示す生徒に有効

【学びたい分野，将来に関することなど，入学目的が明確】
- 自分の勉強したい内容及び進学したい大学を自分でしっかり見きわめられる
- 入学目的をはっきりさせることができる
- 受験生が納得して入学できる

【入試の多様性，人物重視，受験機会の増加】
- 新たな受験の機会を与えたという点
- 入試方法は複数あることが望ましい
- 幅広く丁寧に受験生の能力，適性，意欲を判断してもらうことができる
- 学力と人物の両面から選抜するのは大変良いこと
- 生徒の個性が尊重される

特定の分野に強い関心と意欲を示す生徒を，学力と人物の両面から選抜しようとするＡＯ入試の趣旨が評価されているようだ。

1.1.2 「改善した方がよい」と判断した理由

続いて，なぜＡＯ入試を改善した方がよいと思うのかその理由を質問してみたところ，以下のような理由が示されていた。

【入試内容が不明確，かかる労力の問題】
- 合否基準が曖昧
- 出願条件を明確にして
- ＡＯ入試へのエネルギーの消費が大きすぎる
- 受験生や高校教員にかなりの負担になっている
- 大学によってAO入試の考え方，試験日，選択方法がまちまち
- 推薦入試との区別がつきにくい

【不合格者や受験勉強中の生徒への配慮】
- 何度も大学に通って不合格になった生徒は，一般入試には間に合わない場合が多い
- 落ち着いて勉強するムードがなくなっている
- 早く進路が決定し，他の者が浮き足立つ
- 青田買い
- 早期からの取り組みにより，学校生活にも支障がある
- 最終段階で不合格だった場合，長時間のロスを挽回するのが大変
- 受験生を遅くまでひっぱって，不合格になった場合の指導に困る

【基礎学力不足への不安】
- 入学後その大学で十分やっていけるかどうかの判断がきちんと出来ているのか疑問が残る
- 教科学力をつけなくてはいけない時期におろそかになっている
- ある程度の学力評価を行うべき
- 学力を伸ばして，進路実現させる指導方針が通らなくなる
- AO入試のための勉強をすることは結果として基礎学力の低下につながってしまう

【高校での進路指導への影響】
- スタイルがまちまちで，指導が困難
- 一般的な進学指導，受験指導などからはずれてしまう
- 学校抜きの入試が実施されてしまう
- 生徒が誰に相談することもなく出願してしまうため，後で非常に困る場合がある

【大学の姿勢に対する批判，入試への不信感】
- 本来のアドミッションオフィス型の入試をどの程度充実させたいのか，その姿勢を明確にしてほしい
- 趣旨は理解できるが，現実には大学での研究内容があまり公表されていない
- 「専願制」がほとんどであることに疑問を感じる
- 単に入試の回数を増やす制度と思える
- 片寄った人物が応募する傾向にある
- 大学側(だけ)に都合のいい制度になっている

合否基準が曖昧であるとか，受験生や高校教員にかなりの負担になっている，不合格となった場合次の入試に向かって挽回するのが大変，などが指摘されていた。

1.2 採用している入試方法との関係について

図1は，AO入試に対する適切さの意識別に各種入試方法を使って大学進学した者の割合を示したものである。

AO入試に対する適切さの意識の違いによって大学進学者の比率が異なっていることが，有意なデータとして認識できた入試方法は，大学入試センターや個別試験をベースにした選抜方法（以下，一般入試という）と指定校推薦であった。すなわち，AO入試制度に対して「全面的に改善した方がよい」と回答した高校は，「適切である」と回答した高校に比べて，大学入試センターをベースにした一般入試を使って大学進学している高校生の比率が有意に高くなっている（それぞれ，63.4%と 36.6%）。逆に，指定校推薦を使って大学進学している高校生の割合が有意に低くなっている（それぞれ，12.4%と 25.2%）。現在のところ，AO入試を使って進学する比率が低いこともあり，AO入試に対して「全面的に改善した方がよい」と回答した高校では，「適切である」と回答した高校に比べて，AO入試を使って大学進学している高校生の比率は，傾向としては低くなっているが有意な差があるとはいえなかった。

さらに，表3では，AO入試以外の入試方法の適切さの意識とAO入試の制度としての適切さの意識との関係について示している。

一般入試の適切さの意識とAO入試の適切さの意識との間には有意な関係はなかったが，推薦入試を適切であると認識している教員ほど，AO入試を制度として適切であるとする意識が強くなっていることが明らかとなった（危険率 0.1%）。

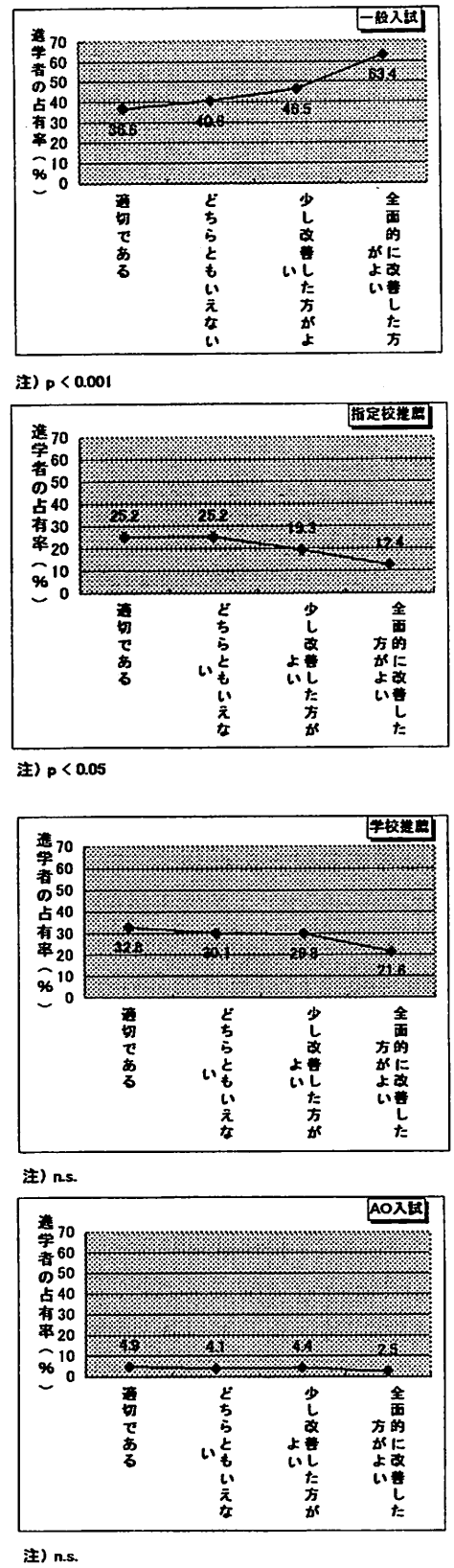

図1 AO 入試の適切さの意識別による各種入試方法を使って大学進学した生徒の比率

表３ 各種入試方法の適切さの意識とＡＯ入試の制度としての適切さの意識との関係

		AO入試の制度としての適切さの意識				合計
		適切である	どちらともいえない	少し改善した方がよい	全面的に改善した方がよい	
一般入試	適切である	42 32.8%	37 28.9%	26 20.3%	23 18.0%	128 100.0%
	どちらともいえない	15 28.8%	20 38.5%	8 15.4%	9 17.3%	52 100.0%
	改善した方がよい	19 20.3%	16 25.0%	23 35.9%	12 18.8%	64 100.0%
合計		70 28.7%	73 29.9%	57 23.4%	44 18.0%	244 100.0%

注）カイ2乗値=10.44、自由度=6、n.s.

		AO入試の制度としての適切さの意識				合計
		適切である	どちらともいえない	少し改善した方がよい	全面的に改善した方がよい	
推薦入試	適切である	68 45.9%	45 30.4%	24 16.2%	11 7.4%	148 100.0%
	どちらともいえない	7 15.6%	20 44.4%	10 22.2%	8 17.8%	45 100.0%
	改善した方がよい	11 14.1%	16 20.5%	25 32.1%	26 33.3%	78 100.0%
合計		86 31.7%	81 29.9%	59 21.8%	45 16.6%	271 100.0%

注）カイ2乗値=52.84、自由度=6、p＜0.001

		AO入試の制度としての適切さの意識				合計
		適切である	どちらともいえない	少し改善した方がよい	全面的に改善した方がよい	
飛び入学	適切である	34 31.2%	25 22.9%	30 27.5%	20 18.3%	109 100.0%
	どちらともいえない	34 33.0%	42 40.8%	15 14.6%	12 11.7%	103 100.0%
	改善した方がよい	18 31.0%	14 24.1%	14 24.1%	12 20.7%	58 100.0%
合計		86 31.9%	81 30.0%	59 21.9%	44 16.3%	270 100.0%

注）カイ2乗値=13.12、自由度=6、p＜0.05

1.3 高校の特性との関係

高校の特性別に「ＡＯ入試制度の適切さの意識」の回答傾向を示したのが表４である。

有意な関連性が確認されたのは，「学科構成」（危険率１％）と「大学進学率に基づく分類」（危険率１％）と「卒業者に対する浪人比率」（危険率５％）の３つの特性であった。設置形態や中高一貫校であるかどうかとは有意な関連性が確認されなかった。

すなわち，学科構成別にみると，専門学科や総合学科のみで構成された高校は，その他の形態の高校に比べて「適切である」の回答率が高くなっており，逆に，普通科のみで構成された高校は「全面的に改善した方がよい」の回答率が高くなっている。

また，大学進学率の低い高校ほど，ＡＯ入試を「適切である」と回答する比率が高くなっており，逆に，大学進学率の高い高校ほど，ＡＯ入試を「改善した方がよい」と回答する比率が高くなっている。

さらに，卒業者に対する浪人比率の低い学校ほど，ＡＯ入試を「適切である」とし，浪人比率が高い学校ほど，「改善したほうが良い」とする傾向があることも認識された。

表４ 高校の特性別･AO 入試制度の適切さの意識

		AO入試の制度としての適切さの意識				合計
		適切である	どちらともいえない	少し改善した方がよい	全面的に改善した方がよい	
学科構成	普通科	49 28.3%	48 27.7%	38 22.0%	38 22.0%	173 100.0%
	普通科＋専門学科	8 22.2%	18 50.0%	7 19.4%	3 8.3%	36 100.0%
	専門学科	24 52.2%	14 30.4%	4 8.7%	4 8.7%	46 100.0%
	総合学科	5 38.5%	2 15.4%	6 46.2%		13 100.0%
合計		86 32.1%	82 30.6%	55 20.5%	45 16.8%	268 100.0%

注）カイ２乗値=29.44、自由度=９、p＜0.01

		AO入試の制度としての適切さの意識				合計
		適切である	どちらともいえない	少し改善した方がよい	全面的に改善した方がよい	
大学進学率に基づく分類	分類1	9 27.3%	7 21.2%	12 36.4%	5 15.2%	33 100.0%
	分類2	14 23.7%	19 32.2%	10 16.9%	16 27.1%	59 100.0%
	分類3	20 26.3%	21 27.6%	20 26.3%	15 19.7%	76 100.0%
	分類4	23 35.9%	24 37.5%	14 21.9%	3 4.7%	64 100.0%
	分類5	20 51.3%	12 30.8%	3 7.7%	4 10.3%	39 100.0%
合計		86 31.7%	83 30.6%	59 21.8%	43 15.9%	271 100.0%

注１）分類１：大学進学率70%以上、分類２：大学進学率55%以上
分類３：大学進学率30%以上、分類４：大学進学率10%以上
分類５：大学進学率10%未満
注２）カイ２乗値=28.75、自由度=12、p＜0.01

		AO入試の制度としての適切さの意識				合計
		適切である	どちらともいえない	少し改善した方がよい	全面的に改善した方がよい	
卒業者浪人率	分類1	46 35.9%	46 35.9%	28 21.9%	8 6.3%	128 100.0%
	分類2	11 26.8%	12 29.3%	10 24.4%	8 19.5%	41 100.0%
	分類3	14 27.5%	15 29.4%	9 17.6%	13 25.5%	51 100.0%
	分類4	11 24.4%	10 22.2%	11 24.4%	13 28.9%	45 100.0%
合計		82 30.9%	83 31.3%	58 21.9%	42 15.8%	265 100.0%

注１）卒業者浪人率＝大学進学希望者の浪人者数／卒業者数＊100
注２）分類１：卒業者浪人率５％未満、分類２：卒業者浪人率10%以下
分類３：卒業者浪人率20%未満、分類４：卒業者浪人率20%以上
注３）カイ２乗値=20.53、自由度=９、p＜0.05

2. 大学教員の入試に対する意識構造

2.1 「AO 入試」の制度としての適切さの意識

大学全学・学部入試委員長（以下，大学教員と略）に，「ＡＯ入試」の制度としての適切さの意識を質問したところ，有効回答者のうち，「とても適切である」は 6.1%，「ある程度適切である」は 30.5%，「どちらともいえない」は 51.6%，「少し改善した方がよい」は 4.3%，「全面的に改善した方がよい」は

7.5%であった（表５）。

表５ AO 入試の制度としての適切さの意識

	回答者数(%)
とても適切である	21 (6.1%)
ある程度適切である	106 (30.5%)
どちらともいえない	179 (51.6%)
少し改善した方がよい	15 (4.3%)
全面的に改善した方がよい	26 (7.5%)
合計	347 (100.0%)

以下の分析では，選択者数の少ないカテゴリー「とても適切である」を「ある程度適切である」と合わせて「適切である」(回答数 127 校(36.6%))，「少し改善した方がよい」と「全面的に改善した方がよい」を合わせて「改善した方がよい」(回答数 41 校(11.8%))に再カテゴリー化したものを利用した。

高校教員に比べて（表１），大学教員の方がＡＯ入試を「適切である」とする比率が高くなっており（それぞれ，31.8%と 36.6%），逆に，「改善した方がよい」とする比率が低くなっている（それぞれ，37.9%と 11.8%）。

2.1.1 「適切である」と判断した理由

なぜＡＯ入試が適切であると思うのかその理由を質問してみたところ，以下のような理由が示されていた。

【入学してほしい学生像を考える契機となる】
・入学して欲しい学生像について考える契機となっている
【高校教育へ良い影響】
・高等学校での学生への指導方法と内容の変化を期待できる
【優秀な学生が獲得できる】
・方法によっては，偏差値に左右されない優秀な学生を得ることが可能と考える
・アドミッションポリシーに基づいて意欲を持った学生確保ができる
・一般入試で受からない層から，大学教育に適した人材を選抜できる
・浪人生の中から目標意識，意欲のある学生を選抜できる一方法と思える
・面接等，時間をじっくりかけられるので人物優秀者をあつめ易い
・学習意欲の高い学生を選抜できる
・学内を活性化させる力をもった個性的な学生がとれる
・優秀な学生が受験・入学している
【入試は多様化すべきだから】
・入試は多様化すべきである
・学力試験では評価できない資質や能力を評価しようとする点において適切である
・学生の姿が具体的に見える
【既に実績を上げている】
・現在ＡＯ入試に近い形で実施している自己推薦入試の結果がまずまずの成績をあげているから
・入学後の適応性が概して良好
・入学者が一定の成果をあげている

入学して欲しい学生像について考える契機となったり，アドミッションポリシーに基づいて意欲を持った学生が確保できる，ということなどが指摘されていた。

2.1.2 「改善した方がよい」と判断した理由

続いて，なぜＡＯ入試を改善した方がよいと思うのかその理由を質問したところ，以下のような理由が示されていた。

【合否基準が曖昧・困難】
・合否の基準があいまいである
・審査する側の人間の判断がどれほど信頼できるかが判らない
・合否判定の明確な基準を作ることが現時点では出来ていない
【学力が保証できない】
・学力以外を客観的に評価するのは難しい
・学力の保証ができない
・基礎学力，勉強習慣について不安を感ずる
・センター試験を課さないときわめて成績の悪い学生が志願してくるのみ
・学力試験が必要ないかのような AO 入試には反対
・楽に入学できる方法として利用されるのではないかという懸念をいだく
【コスト・パフォーマンスが悪い】
・教員の本来的任務を圧迫する結果が懸念される
・募集人数にたいし，労力がかかりすぎる（コストパフォーマンスが悪い）
・十分な時間をかけて良い学生をとるという趣旨と，双方の時間的，労力的ロスとのかね合いが判断しにくい
・受験者側にとっては，入試期間が長期となり，重荷である
【入学時期が早まっている】
・実施時期などをみると高校生の「青田買い」に近い状況となっていることも事実であり，何等かの規則あるいは基準が必要であると考える
・入試時期をますます前倒しする方向は好ましくない
・高校教育に良い影響を与えていない
【専門職員が合否判定することは問題あり】
・ＡＯオフィス要員単独で合否を決定することに疑問
・専門職が担当すると全教官の自覚が少なくなる

【入試方法として問題あり】
・ＡＯ入試と大学入学後の学生の実態との関係が不明である
・入試方法として有効性が確定していない
・人材確保にはつながっていないケースが多い
・学生の資質が両極端となる傾向にある
【現行入試で既にすぐれた学生を確保】
・現行入試ですぐれた学生を確保しており，入試に大きな労力を用いるよりは入学後の教育，選別に力を入れた方がよい

選抜の基準が難しいとか，コストや時間がかかりすぎる，などが指摘されていた。

2.2 採用している入試方法との関係について

その学科が採用している入試方法とＡＯ入試の制度としての適切さの意識との関係について示したのが表６である。

ＡＯ入試の制度としての適切さの意識と最も強い関連性を示したのはＡＯ入試の採用状況である。すなわち，ＡＯ入試を採用している学部の教員は，ＡＯ入試を制度として適切であるとする意識が強くなっており，逆に，採用していない学科の教員ほど，改善した方がよいとする意識が強いようである。

続いて強い関連性を示したのは附属高校特別枠選抜で，さらに指定校推薦も同様に，それらの入試方法を採用している学科の教員は，ＡＯ入試の制度を「適切である」とする意識が有意に強くなっている。なお，推薦入試については有意な関連性が確認されなかった。

ＡＯ入試以外の入試方法の適切さの意識とＡＯ入試の制度としての適切さの意識との関係について示したのが表７である。

特に，ＡＯ入試の制度としての適切さの意識と最も強い関連性を示したのは推薦入試の制度としての適切さの意識である。すなわち，推薦入試を適切であると認識している教員ほど，ＡＯ入試を制度として適切であるとする意識が強くなっている。

表６　各種入試方法の採用状況とＡＯ入試の制度としての適切さの意識との関係

		AO入試の制度としての適切さ			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
ＡＯ入試	採用している	65	13	8	86
		75.6%	15.1%	9.3%	100.0%
	採用していない	62	166	32	260
		23.8%	63.8%	12.3%	100.0%
合計		127	179	40	346
		36.7%	51.7%	11.6%	100.0%

注）カイ2乗値=77.29、自由度=2、p＜0.001

		AO入試の制度としての適切さ			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
推薦入試	採用している	92	136	34	262
		35.10%	51.90%	13.00%	100.00%
	採用していない	35	43	6	84
		41.70%	51.20%	7.10%	100.00%
合計		127	179	40	346
		36.70%	51.70%	11.60%	100.00%

注）カイ2乗値= 2.62、自由度=2、n.s.

		AO入試の制度としての適切さ			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
指定校推薦	採用している	49	43	13	105
		46.7%	41.0%	12.4%	100.0%
	採用していない	78	136	27	241
		32.4%	56.4%	11.2%	100.0%
合計		127	179	40	346
		36.7%	51.7%	11.6%	100.0%

注）カイ2乗値= 7.55、自由度=2、p＜0.05

		AO入試の制度としての適切さ			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
附属高校特別枠選抜	採用している	51	38	11	100
		51.00%	38.00%	11.00%	100.00%
	採用していない	76	141	29	246
		30.90%	57.30%	11.80%	100.00%
合計		127	179	40	346
		36.70%	51.70%	11.60%	100.00%

注）カイ2乗値=13.00、自由度=2、p＜0.01

表７　各種入試方法の適切さの意識とＡＯ入試の制度としての適切さの意識との関係

		AO入試の制度としての適切さ			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
一般入試	適切である	49	74	10	133
		36.8%	55.6%	7.5%	100.0%
	どちらともいえない	21	41	8	70
		30.0%	58.6%	11.4%	100.0%
	改善した方がよい	26	30	18	74
		35.1%	40.5%	24.3%	100.0%
合計		96	145	36	277
		34.7%	52.3%	13.0%	100.0%

注）カイ2乗値=13.90、自由度=4、p＜0.01

		AO入試の制度としての適切さ			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
推薦入試	適切である	90	97	19	206
		43.7%	47.1%	9.2%	100.0%
	どちらともいえない	15	49	9	33
		20.5%	67.1%	12.3%	100.0%
	改善した方がよい	15	31	12	58
		25.9%	53.4%	20.7%	100.0%
合計		120	177	40	347
		35.6%	52.5%	11.9%	100.0%

注）カイ2乗値=19.14、自由度=4、p＜0.001

		AO入試の制度としての適切さ			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
飛び入学	適切である	23	33	12	70
		35.7%	47.1%	17.1%	100.0%
	どちらともいえない	77	116	14	207
		37.2%	56.0%	6.8%	100.0%
	改善した方がよい	12	23	13	48
		25.0%	47.9%	27.1%	100.0%
合計		114	172	39	325
		35.1%	52.9%	12.0%	100.0%

注）カイ2乗値=18.09、自由度=4、p＜0.001

2.3 学科の特性との関係

学科の特性別に,「AO入試制度の適切さの意識」の回答傾向を示したのが,表８である。有意な関連性が確認されたのは,「設置形態」（危険率５％）のみであった。

すなわち，私立大学の学科所属教員は国立大学の学科所属教員に比べて「適切である」の回答率が高くなっていた。

また，学科の専門分野や学科への入学者の偏差値に基づく分類と「AO入試制度の適切さの意識」との関係は有意な関係があるとはいえなかった。

表８ 学科の特性別・AO 入試制度の適切さの意識

		AO入試の制度としての適切さの意識			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
設置形態	国公立	56	102	26	184
		30.4%	55.4%	14.1%	100.0%
	公立	11	19	1	31
		35.5%	61.3%	3.2%	100.0%
	私立	60	58	14	132
		45.5%	43.9%	10.6%	100.0%
合計		127	179	41	347
		36.6%	51.6%	11.8%	100.0%

注）カイ2乗値=10.27、自由度=4、P＜0.05.

		AO入試の制度としての適切さの意識			合計
		適切である	どちらともい	改善した方	
学科の専門分野	人文科学系	25	25	5	55
		45.5%	45.5%	9.1%	100.0%
	社会科学系	32	43	6	81
		39.5%	53.1%	7.4%	100.0%
	理学系	12	15	6	33
		36.4%	45.5%	18.2%	100.0%
	工学系	16	25	7	48
		33.3%	52.1%	14.6%	100.0%
	農学系	7	17	1	25
		28.0%	68.0%	4.0%	100.0%
	医歯薬学系	11	26	6	43
		25.6%	60.5%	14.0%	100.0%
	教員養成系	5	13	5	23
		21.7%	56.5%	21.7%	100.0%
	その他	13	10	4	27
		48.1%	37.0%	14.8%	100.0%
合計		121	174	40	335
		36.1%	51.9%	11.9%	100.0%

注）カイ2乗値=16.32、自由度=14、n.s.

		AO入試の制度としての適切さの意識			合計
		適切である	どちらともいえない	改善した方がよい	
入学者偏差値に基づく分類	分類1	16	22	4	42
		38.1%	52.4%	9.5%	100.0%
	分類2	15	26	5	46
		32.6%	56.5%	10.9%	100.0%
	分類3	28	31	8	67
		41.8%	46.3%	11.9%	100.0%
	分類4	37	57	10	104
		35.6%	54.8%	9.6%	100.0%
	分類5	20	31	10	61
		32.8%	50.8%	16.4%	100.0%
合計		116	167	37	320
		36.3%	52.2%	11.6%	100.0%

注１）分類１：入学者偏差値63以上、分類２：入学者偏差値60以上
分類３：入学者偏差値56以上、分類４：入学者偏差値50以上
分類５：入学者偏差値50未満
注2）カイ2乗値= 3.52、自由度=8、n.s.
注3）入学者偏差値は、代々木ゼミナール編「2003大学入試難易ランキング」2002年、から収集。

国公立大学よりも比較的建学の精神などに基づいて大学運営している私立大学が，大学の求める学生像を明らかにして入試を行うことになれているのかもしれない。

3. まとめ

高校と大学の教員の「AO入試制度の適切さの意識」に関する分析の結果から，AO入試をめぐる高校と大学の関係について以下の３点が指摘できる。

第１に，AO入試制度に対しては，大学教員の方が，高校教員よりも「適切である」とする意識が強いようである。逆に，高校教員の方が，大学教員よりも改善した方がよいとする意識が強いようである。

第２に，高校教員のうちで，AO入試制度を適切であると考える者は，推薦入試を適切であると意識する教員である。

また，高校の属性では，AO入試制度を適切であると考える教員の比率が高くなっているのは，専門学科または総合学科の高校や，大学進学率の低い高校である。

第３に，大学教員のうちで，AO入試制度を適切であると考える者は，既に AO 入試や指定校推薦や附属高校特別枠選抜を採用している学科所属教員であったり，推薦入試を適切であると意識する教員である。

また，大学の属性でみると，私立大学は国立大学に比べて，AO入試制度を適切であると考える教員の比率が高くなっている。

では，なぜこのようにAO入試に対する認識に差が生じているのであろうか。高校教員については以下の３点が考えられる。

第一に，進路指導の在り方やスタンスの違いである。進学校といわれる大学進学が高い高校は,「全体的（一律）」な進路指導を行う傾向があり,進路が多様な学校ほど,「個別的」な対応を行っている。

第二に，入学者選抜の「評価」に対する視点の違いである。試験の成績等，数値化でき

る「明らかな」評価を求める高校と，個人の潜在能力や意欲など「多様な」評価を求める高校の存在である。

さらには，大学に対する視点や要望，高大接続の認識に関する相違も，ＡＯ入試に対する意識の認識差に影響があると思われる。

大学教員，特に国公立大学の教員は，入学志願者の学力面以外の個性を評価する経験が少ないことがあげられる。その証拠に，ＡＯ入試を採用している大学の教員はＡＯ入試に理解を示している。

今後，18 才人口がますます減少し，各大学・学部における志願者数が減ったり，志願者の学力や学習に対する動機が低下してくることは必至である。各大学は，自助努力によって，各機関の教育目標・目的にそって卒業生の質を高めることが求められてはいるものの，大学教育を高校教育に連続したものと考えたカリキュラムを開発するなど，高大連携を整備することも必要ではないだろうか。現在の入試改革が，そのような制度整備なしに実施されていることが，ＡＯ入試に対する認識の違いや誤解を生んでいるとも考えられる。

文献

中央教育審議会，1996,『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申)』.

中央教育審議会，1999,『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』.

河合塾のホームページ

「日本における AO 入試の実態」（http://www.keinet.ne.jp/keinet/doc/keinet/jyohoshi/gl/toku9907/ao_2.html）を参照。